



山岳文化の複素数的世界観

田中文夫 (神奈川県)

昨年7月、数学者・吉田武氏の著書「虚数の情緒」(東海大学出版会, 2012.3.20 第1版23刷)を読み終えました。A5版厚さ5cmの大著です。虚数という数は文系の方々には馴染みがないと思われませんが、数学や量子物理学、電気の世界では普通に扱う数であります。虚数は「想像された数」ということで、imaginary number 記号 i で示します。電気の場合 i は電流記号として用いられますので、虚数記号は j としています。さらに連続した数とする実数と、虚数を組み合わせた複素数 (complex number) は、 $Z=a+bi$ と式で表現されます。同じ式を電気の表現にすると $Z=a+jb$ となります。

車椅子の理論物理学者スティーブン・ホーキング博士は、宇宙の時間を「実数の時間軸」と「虚数の時間軸」とに分けて構造的に捉え、一般相対性理論が破綻する「特異点定理」を証明しています。

ここに実数や虚数を持ち出した理由は、自然の中で活動する山岳文化自身が、数学や物理学的な「実数」の部分と「虚数」な部分を含んだ、「総合」ではないかと考えるからであります。数学では「実数+虚数=複素数」としていますが、複素数にあたる内容を、山岳文化と読み替えることができそうです。

では「実数」にあたる部分は何が該当するのでしょうか。私の考えでは「具象」に含まれるものがそれにあたります。「具象」とは形を備えていること、具体的なもののことを指します。哲学でいうところの「客観や形而下」の分野です。現在の山岳文化学会で研究対象とされているほとんどは、この分野に含まれます。

他方「虚数」にあたる部分とは、「抽象」に含まれるものといえましょう。感情や意識、思考、論考、夢や希望等々、哲学でいうところの「主観や形而上」の分野です。その構造や機能は人間脳そのものであり、分子生物学的脳理解は進んでいます。コンピュータは人間脳に近づきつつありますが、まだ「虚」への対応が図られません。山岳文化学会の中では研究対象が少なく、詩の発表や思想研究が少しありました。

科学専門学会であるならば、実数の部分として客観的論述で埋めつくされるのでしょう。また文学界においては、虚な部分の主観的感情表現を様々加工、工夫されるのでしょう。そして山岳文化においては、虚実入り混じった総合要素であることが、どれほど理解されていることでしょうか?それゆえに山岳文化は他にないほどの多岐にわたって拡散し、一点とらえどころがないものとなります。

創立して10年を過ぎ、一定の形はでき上がりました。しかし私の実感においては、虚実が織り成す多様な世界観への認識が、不足しているのではないかと思います。学術他団体にはない極めて希で多様な分野を対象としている山岳文化学会は、他の団体を参考にしつつも、自信を持って独自の在り方と進化を果たすべき、と思う今日です。

(2013.02.22)